



梅島小だより

「さっぱりわからない。実に面白い。」

校長

近津 勉

歌手で俳優の福山雅治さんが出演する映画「ガリレオ」。その主人公で、天才物理学者の「湯川学先生」が、難問に直面した時のセリフが、タイトルの「さっぱりわからない。実に面白い。」です。

湯川先生は「現象には必ず根拠がある」と、誰もが「そんなことありえない。」ということでも、「『ありえない?』そんなことありえない。」と、科学的に解明しようとし、そして、ちょっとしたヒントから、数式を導き出し、時には大掛かりな実験装置まで駆使して検証しようとし、何度失敗をしてもあきらめずに実験を繰り返し、納得のいくデータを集めていく姿には、わからないことへの深い知的好奇心と、わかろうとする強い探究心を感じます。

ところで、教室での子ども達の勉強の場面ではどうでしょう。私たち大人は、子どもが「わからない」というサインを発した時、どういう反応をしているのでしょうか。

「なんでわからないの?」「どこがわからないの?」という問いを投げかけてはいないでしょうか。時には、「ちゃんと先生の話聞いてないからわからないんじゃないの?!」などと厳しい言葉になってはいないでしょうか?

そうした言葉を投げかけることで、「『わからないこと』は『いけないこと』」というメッセージを送ってしまっていないでしょうか? 私自身のこれまでを振り返っても、反省の思いしかありません。

人間は元々、知的好奇心をもった生き物です。だからこそ、数々の発見や発明をし、現在のような高度な文明社会を築いてきたのだと思います。子ども達も本来は、様々なことに興味や関心をもっています。小さい子どもほど、「なんで?」「どうして?」と質問してくるものです。

わからないことやできないことに対して、「やってみよう!」「どうやったらできるかな?」と、好奇心を掻き立てるような指導、授業がしたいものです。わからないことがわかるようになったり、できないことができるようになったりすることは、本当はうれしいことなのです。つまり学ぶことは「実に面白い」ことであるはずなのです。



湯川先生のように、わからないことを楽しめるような勉強ができれば、とても素晴らしいことではないでしょうか? 「わからない? そう、わかったら楽しいだろうね! 面白そうだね!」と言って、一緒に考えてあげたいですね。